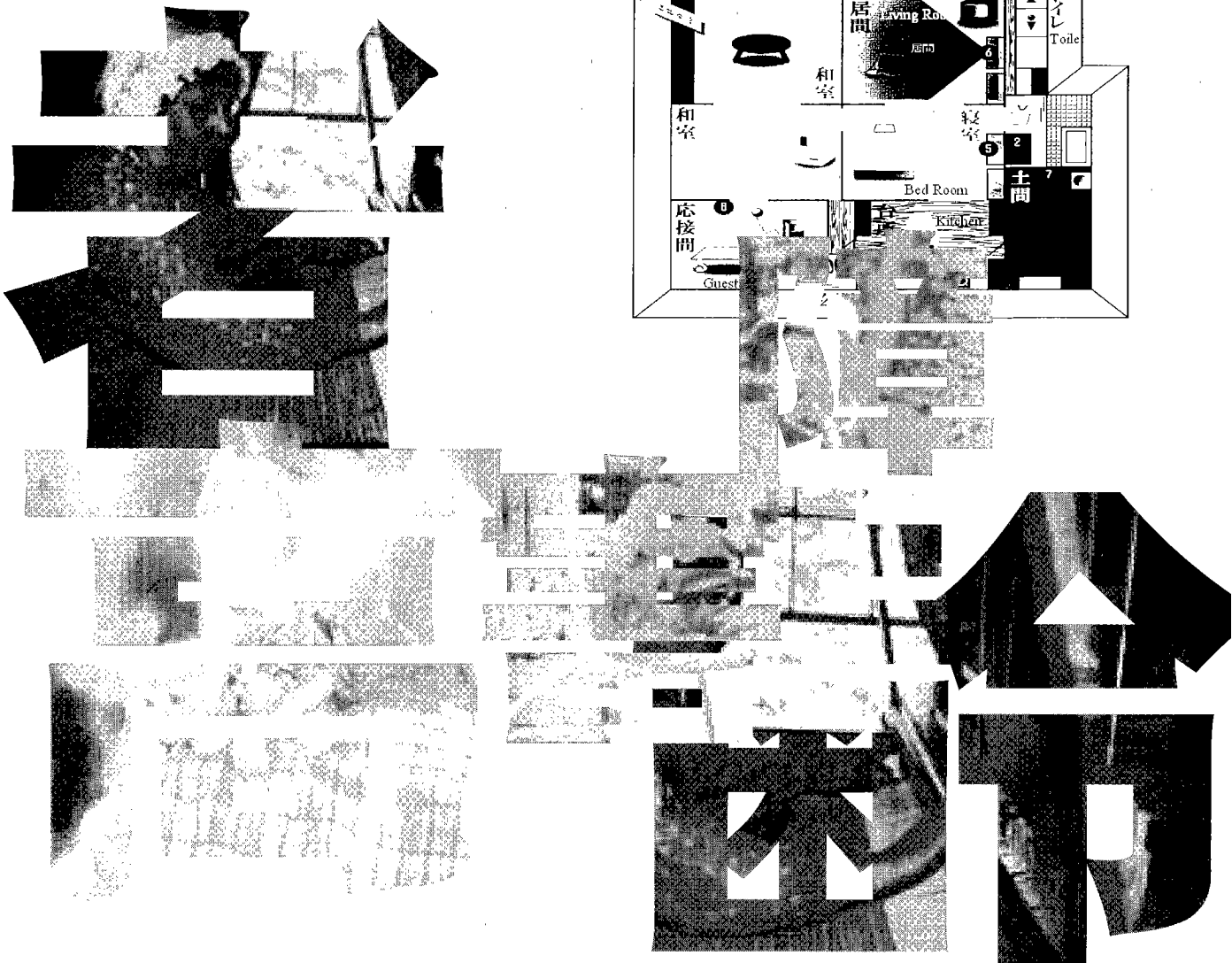


高齢者や障害者を支える 情報技術

—社会の側に眼を向けて—



特集

高齢者や障害者を支える情報技術—社会の側に眼を向けて— 編集にあたって

市川 薫 千葉大学

世界中がY2K問題で揺れたように、現代社会ではその隅々まで、情報技術とのかかわりから逃れることができなくなってきた。その事情は、良きにつけ悪きにつけ、高齢者にとっても障害者にとっても同じことである。

我々は良かれと考えて、情報技術の研究開発に取り組んでいるのであるから、情報技術が高齢者や障害者の生活に対しても、どのように寄与できるのか、改めて考えてみたいと考えた。しかし、この課題に対しては、これまで個人のレベルではいくつかの場で取り上げられてきたように思われる。そこで今回は、個人から離れて個々人を取り囲む社会に眼を向け、高齢者や障害者を支える情報技術に焦点を当ててみたいと考え、本特集を企画した次第である。

ここでは、6つの視点からこの課題を捉えてみようと思う。まず第1は、国などの公的立場はどのように取り組んでいるかである。最近では町の中で車椅子の方など障害を持つ方に会う機会が増えたように思う。国連の障害者の10年や、アジアの障害者の10年、そして障害を持つアメリカ人法、日本の総理府など省庁の取り組みなどが功を奏し、社会の理解が多少なりとも改善されてきたのであろうか。第2は、情報技術としてはどのように考えたらよいのか、

情報機器のアクセシビリティ指針を中心に取り上げる。第3は障害者などが福祉機器などの情報を得たいと考えたとき、どこから得ることができるのか、という問題を取り上げることにした。そして第4には日常生活の情報の供給源として大きな役割を持つマスコミの中から放送の技術を取り上げた。第5は高齢者の介護が大きな社会的課題としてクローズアップされている今日、その分野へ情報技術はどのように貢献できそうか、その事例をみる。最後に、障害者、高齢者が情報技術を使いこなすための支援体制はどうか、という視点を取り上げた。

執筆は、それぞれの課題に対し自ら汗を流して取り組み駆け回っておられる第一線の方々をお願いした。それこそ本当にお忙しい毎日をご過ごしておられる中で執筆いただいたことに感謝申し上げたい。

清原さんは各省庁の福祉関係の委員などをする一方で、自らNPO活動にも加わって活動しておられる方である。関根さんは長く大企業で障害者対応の窓口を勤めていたが、ついに会社を辞して自らその方面の会社を設立、内外を飛び回って問題解決に取り組んでおられる。岩淵さんと中邑さんは各企業に働きかけ福祉機器のデータベースを毎年作成、本やイン

ターネットで情報を提供する一方、障害者と技術者を結び付けるイベントを毎年実現させている方である。中林さん、安藤さん、都木さんは聴覚障害者などからの真剣な要望に応え、技術開発に取り組んでこられた音声技術者である。太田さんは実は日本の情報機器アクセシビリティ指針の産みの親であり、現在は高齢者介護などの技術開発に取り組みながら各種の啓蒙活動にも精力的に取り組んでおられる。竹中さんは、重度の障害者の母親として課題の重要さに気がつき、自立支援のNPOを設立、計算機利用技術の教育を進めながら日夜東奔西走しておられる。

この特集を機会に、これまでこの領域に関係してこれなかった皆様にも、眼を向けていただき、各自の技術をぜひこの方面にも提供していただければ幸いである。

(平成12年3月23日)

